ホスピタリティー研究概略 2006～2007

研究体制
高橋順一　早稲田大学教授
清家竜介　早稲田大学　非常勤講師
足立裕子（有）文化技術デザイン　代表
堀美和子　　研究者
高津春樹　（財）ハイライフ研究所
仙洞田伸一　同上
萩原宏人　　同上

研究目的

近代産業社会は多くの恩恵を人々にもたらしてきたが、逆にその進展の中で自然破壊や健康障害の拡大、ストレス社会、貧富の差の拡大等さまざまな問題を引き起こしてきた。近代産業社会は物質的な豊かさや利便性の革新等により生活上の満足・充足を提供し続けてきたが、本当の意味での「快」を失ってきた社会であったともいえる。そして現在の社会状況を見ると、今まさにそれぞれの能力、それぞれの生のあり方で、本当の意味での「快」や「充足」をいかに得るかを考えてみる必要がでてきた。　ホスピタリティの目的は簡単に言えば「快さの実現」であり、その概念の中には上記課題に対する解を内包していると考えられます。そして、現在、マニュアルサービスによる生活者に対する満足・充足の提供に限界を感じている産業界においても、サービスを越える満足・充足の提供を可能にする概念として「ホスピタリティ」に注目が集まっています。

本研究においては、ホスピタリティを体現する社会や文化の実現のための設計原理を探求することを中心に作業仮説を構築をするとともにホスピタリティ原理に拠って構成される社会及びその下にある企業・行政などの活動を統御するための技術（ホスピタリティマネジメント＝仮）の確立へ向けての模索も考えている。

今なぜホスピタリティなのか ― 問題の前提―

１．ホスピタリティ概念の定義

まず私たちの考えるホスピタリティという概念を定義しておきたいと思います。ホスピタリティという言葉の原義は「**歓待＝もてなし**」です。したがってホスピタリティとは何かを問おうとするとき、「わたし」が「あなた」を迎え歓待＝もてなしをするという場面から問いは始まります。さらにいえば、この場面において成立する「わたし」と「あなた」の関係のあり方、そしてそうした関係を通して再定義される「わたし」と「あなた」のそれぞれのあり方が問いの核心となります。言い換えれば、ホスピタリティとは何かという問いの本質とは、「歓待＝もてなし」という場面を通して見えてくる人間同士の関係のあり方、その性格を明らかにすることであり、さらにはそうした関係から逆に照らし出される個々人のあり方、その中身を明らかにすることなのです。

さて私たちが帰属する社会的現実において一般的に成立する人間同士の関係は、多くの場合、利害や打算、あるいは「支配する－支配される」、「相手を自分の目的実現のための手段にする」といった要素や性格を伴います。こうした要素や性格を伴う関係をとりあえず「**交換的な関係性**」と呼んでおきたいと思います。というのもこうした関係の典型として浮かびあがってくるのが「市場」、つまり諸個人が自分の利益を求めてもの（商品）を売り買い（交換）する場である「市場」だからです。「交換的な関係性」は「市場」における諸個人の関係を典型とする形で捉えることが出来ます。その一方、この「交換的な関係性」には、他人に対する支配や手段化が伴うという点で、「**権力的な関係性**」という要素が含まれます。この「権力的な関係性」は、最終的には「国家」における支配するものと支配されるものの関係へと収斂してゆきます。こうして私たちの帰属する社会的現実における人間同士の関係は、基本的にこの、「市場」と「国家」へと収斂する「**交換的・権力的な関係性**」から成り立っています。

では「歓待＝もてなし」の場面における人間同士の関係のあり方とはどのようなものなのでしょうか。そもそも私たちの社会では本当の意味での「歓待＝もてなし」が成立するのがとても難しくなっています。それは、「歓待＝もてなし」を成り立たせるための条件が、私たちの社会の一般的な関係性のあり方としての「交換的・権力的な関係性」とは根本的に異質だからです。「歓待＝もてなし」が真に成立するためのもっとも大切な前提条件は、「相手の身になって考える・ふるまう」という姿勢です。つまり「大盤振る舞い」というような言葉に示されているように「ふるまう」こと、言い換えれば経済を度外視した純粋な**贈与**への志向が「歓待＝もてなし」の本質なのです。そこには利害や打算はありません。そのような要素が存在すれば贈与は成り立ちませんから、たちまち「歓待＝もてなし」ではなくなってしまいます。もちろん支配や手段化も存在しません。「歓待＝もてなし」において根幹をなすのは、お互いに相手の身になってふるまうことを通じて成立する純粋な贈与の歓びの感覚の交差、つまり「**交歓**」だからです。そしてこの「交歓」を通して、一切の支配的な要素や手段的要素を含まない純粋な人間同士の関係が成立します。しかもそこにはそうした関係性を形づくろうとする相互的な意志・努力が働いているのです。そうした意志・努力を伴う関係性は、「共にある」こと（共同性）と「共に為す」こと（協働性）を同時に備えた「**協同性**」としての関係性を意味しています。私たちは、「歓待＝もてなし」の場面における、「交換的・権力的な関係性」とは原理的に異質な、「交歓」を目指す「協同性」としての関係性のあり方の実現を、ホスピタリテ

ィの本質として定義したいと思います。したがってこのなかなか適切な日本語訳が見つからないホスピタリティという言葉に対して、とりあえず「**交歓的な協同性**」というやや生硬な訳語をあてておきたいと思います。「わたし」と「あなた」とが排他的・独善的な「エゴ＝私」どうしの打算的な関係によってではなく、もちろん上からの権力や権威による支配的な関係の強制によってでもなく、「わたし」の存在と「あなた」の存在の深部からの純粋な響きあい・通いあいを実感しながら関係しあうことが「交歓的」であることの意味になります。それはまさに「歓び」の、より端的にいえば「快」の分かち合いに他なりません。しかもそうした関係のあり方は、「ともに何かをなし、何かを生み出す」という意味で、「協同性」としての関係のあり方となります。こうした「交歓的な協同性」に基づいた関係性によって、「交換的・権力的な関係性」が支配的である社会において失われてゆく「自律」と「共生」の同時実現の条件（自己実現が同時に他者実現でもありうるような社会的関係性の構築のための条件）が初めて本質的な意味で明らかになってゆきます。ここにホスピタリティ研究の基本的な焦点が存在します。ホスピタリティとは「交歓的な協同性」の実践に他なりません。

ここでまず、今なぜホスピタリティが問題にされなければならないのか、ホスピタリティという概念を通じて私たちが何を目指しているのか、何を求めようとしているのかを明らかにしておきます。

２．ホスピタリティのめざすもの

ある意味でホスピタリティが目指し実現しようとしているものを言葉に表すのは易しいともいえます。ホスピタリティの目標は「快さの実現」だからです。

ここでいう「快さ」とは、様々な重圧やストレスから完全に心身が解放され、文字通りリラックスした状態になること、そしてそうした心身のリラックスした状態の中で私たちの日々の暮らしや活動が営まれことを意味しています。ホスピタリティが目指すのはこうした「快さの実現」以外にはありません。

しかし完全に心身がリラックス状態にあることとしての快さを実現するための条件を、さらにはそうした「快さ」を土台にしたかたちで私たちの生活や仕事が営まれるための条件を、あるいはそもそもなぜそうした「快さ」の実現がひとつの意識的な課題として追求されるべき根拠・理由を明らかにすることは、そんなに易しいことではありません。実はホスピタリティ問題の難しさはここにあります。ここにおいてホスピタリティ問題は、私たちの存在のあり方に関する根本的な問いかけと発想の転換を要求するからです。

３．自然こそが生命の内なる本質である

さきほど言及した「快さ」、すなわち心身の完全にリラックスした状態の実現というホスピタリティの核心的課題は、私たちの存在の根幹である生命のあり方に深く関連しています。「快さ」とは、本質的には私たちの生命の健やかな現われの状態を意味しています。

私たちの生命はその根源を自然に負っています。もう少し正確に言えば、生命は自然の有機的な一要素だということです。ここでいう自然は、外的・物質的環境だけを意味しているわけではなく、自然の根源

が、何よりも数十億年前に誕生したこの地球という場において様々な要因が組み合わさって生命という現象が生み出され、さらにその生命現象が高度に発展してゆく過程を促していった気の遠くなるような長い歴史に根ざしていることをいいます。つまりここでいう自然とは、そうした長い地球の歴史の中で形づくられてきた、生命現象を可能にし、支えている地球環境の総体を指し示しているのです。そこには水、空気、大地、エネルギーなどの基本要素に加え、それらの諸要素をたがいに有機的なかたちで結び付けながら生命の再生産と進化を促すDNAのレヴェルから個体、種、類の代謝・維持・繁栄のレヴェルにまで及ぶ生態系全体の巨大な連鎖が含まれています。こうした自然に支えられて私たち人類を含む地球上の生命全体が今日まで多様な展開の歴史を営んできたのでした。それは、こうした自然こそが生命の内なる本質であることを示唆しています。

４．知性の獲得と社会・文化環境の生成

さて人類がこうした生命の多様な展開の歴史の頂点に位置していることはいうまでもなく、人類はその生命活動の進化の過程の中で、おそらくは樹上から地上に降りて直立二足歩行を始めた影響に基づく脳（とくに前頭葉）の爆発的ともいえるほど高度な発達によって、他の種にはみられない「知性」と呼ばれる思考・判断能力を獲得したのでした。人類が獲得した知性は、人類が自分の属している自然という生態系の有機的な連鎖から離脱して、それを意識的に利用することを可能にしました。道具の発明がその第一歩でした。言語の使用がそれに続きました。

これによって人類は自然そのものという第一次生態環境とは区別をされる人為的な第二次生態環境としての社会・文化環境を作り上げたのです。このとき人類にとって第一次的な自然が初めて外部化の対象となったのでした。

いわば第二の自然ともいうべき社会・文化環境の内部で人類の歴史は急速な発展を遂げることになります。地球全体の歴史からいえば極めて短い時間でしかない数百万年、私たちに直接つながる現生人類としてのホモ・サピエンスの誕生からいえばわずか１０万年あまりで、人類は地球が数十億年かけて形成してきた自然全体を社会・文化環境の発展のための資源として全面的に活用しうる体制を実現したのでした。

その土台となったのが、知性の働きを自然に対する働きかけとして具体化する媒体としての「道具（技術）」と「言語（コミュニケーション）」の高度な進化であったことはいうまでもありません。そしてこの延長線上に出現したのが自然利用の徹底的な組織化・効率化の体系としての産業文明の歴史なのです。

５．生命の本質および条件とそれへの気づき・覚醒（awareness）

ここで産業文明の問題に入る前に、あらためて人類における生命問題を考える上での基本に立ち帰っておきたいと思います。

人類はたしかにその知性の力を通じて第一次的な生態環境とは区別される社会・文化環境を作り上げました。しかしこのことは、人類が生命体として第一次的な生態環境、すなわち根源としての自然から完全に切り離されることを意味しているわけではありません。どんなに脳の働きが巨大化し知性の水準が高くなったとしても、生命体としての人類の存在の土台の部分を支えているのはやはり自然です。

少し感覚的・印象的な例になりますが、たとえば風邪をひいて熱が出たため寝ています状態を考えてみます。そのとき私たちはしばしば、ふだんは当たり前のように受けとめている自分の周囲の環境が違ってみえることを体験します。ものの輪郭がぼやけてきたり、音に過敏に反応したり、縦横の方向感覚が歪んだり、といったことです。こうした現象は、風邪という病のために私たちがふだんは当たり前に維持している社会・文化環境の枠組みが揺らぐことから生じています。もう少し具体的にいえば、熱や悪寒などの症状の影響で私たちの知性の働きを支える意識のレヴェルが低下したために、「正常」な状態なら截然と区分けされている自分と外部の環境の間の境界があいまいになるということです。

言い換えれば、意識＝知性の働きによって支えられている第一次生態環境と社会・文化環境の間の区分が揺らぎ、私たちの存在がより第一次生態環境の方へと引き寄せられるということなのです。つまりそこでは私たちがより自然な生命体の次元そのものへと接近しているのです。

ところでこうした状態はたしかに病の結果生じたものでした。逆に言えば「正常」な状態ではそうした揺らぎは起きないはずだと常識的には考えられます。しかしほんとうにそうでしょうか？正常という言葉にあえてかぎ括弧をつけたのは、第一次生態環境と社会・文化環境が完全に分けられている状態が正常であり、それが揺らぐことは病、つまり異常な状態であるという常識に疑問を感じるからです。

病のときでなくても、日々の生活のなかでふとふだん気づかなかった周囲の様々な兆候や刺激に私たちの五感が反応するということが起きます。そういう瞬間に実は私たちは、意識の底に沈んでいてなかなか気づきにくい自分のからだの持っている生体としてのリズム、すなわち呼吸や体内の循環、皮膚感覚や内臓感覚といった諸要素によってかたちづくられる私たちの内部にひそむ生命の律動の一端に触れているのです。それは私たちの「内なる自然」と呼んでもよいかもしれません。英語に"awareness"という言葉があり、辞書を引くと「意識」とか「自覚」という訳語が記載されていますが、これは"consciousness"としての意識とは本質的に別なものです。aware という言葉はもともと「気づき」を意味しています。それに由来する awareness という言葉は文字通り「気づくこと」を意味しています。そしてこの「気づき」は consciusnes という言葉が示す表層的な意識の次元ではなく、もっと奥深い「内なる自然」への「気づき」の次元、あるいはそうした「気づき」によってもたらされる私たちの自己覚知（self-awareness）のあり様を表しているのです。

私たちの脳の働きに関して、最近の目覚しい脳科学の発達によって従来わからなかった様々な要素が明らかになってきています。脳の持っている、前頭葉を中心とした知性の働きだけにとどまらないほとんど宇宙そのものといってよいような広大な活動内容やその多様性は、脳もまた一個の有機的な全体性・総体性を備えた生態系に比すべき「自然」であることを、より正確に言えば私たちのからだやこころがかたちづくる内なる自然の有機的全体性の一要素であることを示しているといえます。そのことは同時に、私たちの内なる自然としての生命の営みの基底のところでは、脳がつかさどっています論理的思考過程にアナロジーされるようなプログラミングや分類・整除・調整などの諸機能が、生命の持つ自然性、すなわち DNA の塩基配列や細胞の自己組成、自律神経系や免疫、内分泌系によるホメオスタシス（定常性の維持機能）の諸機能と一体化し、「外部環境としての自然」対「生命」とか、「物質」対「精神」とか、「身体」対「こころ」というような二元性では決して捉えることの出来ない有機的一体性、言い換えれば自律的かつホーリスティックな内部環境としての外なる＝内なる自然の一体性を生み出していることをも意味しています。

もう少し整理していえば、私たち人類の生命のあり方は、第一次生態環境としての自然と第二の自然と

しての社会・文化環境の間の相互浸透的なバランス、つまりそれら二つの自然の次元が互いに分離しながら同時に相互に関係しあい浸透しあうことを通じてかたち作られる「有機的一体性」、その全体的な調和によって支えられているということです。それは確かにふだんの生活の中では意識の深層のうちに潜在しており、明確なかたちで自覚されることはほとんどありません。しかしたとえば痛みや熱という現象によって示される外部からの脅威への自己防御反応は、まさしくこの内なる自然における調和やバランスを回復するための生命の機能の現われに他なりません。そしてこのバランスこそが生命体としての人間にとっての根源的な存在条件となるのです。

６．「自然とのバランス」の忘却と「内なる自然の生命」の忘却

なぜ一見ホスピタリティとは無関係に見える問題について長々と言及してきたのでしょうか。じつはこうした生命の本質および条件を確認しておくことがホスピタリティ問題を考える上で不可欠な前提になるからです。

すでに私たちは人類がその知性能力によって産業文明と呼ばれる社会・文化環境のあり方へと達したことに言及しました。ではそこで何が起こったのでしょうか。一言で言えば人類は産業文明の歴史の発展の中で生命の存立条件である第一次的な生態環境としての自然とのバランスを忘却したのです。それは同時に内なる自然としての生命のリズムの忘却をも意味しました。

脳の働きのうち知性に関わる領野だけがずば抜けて拡大してゆくことは、生命発達史の頂点に立つ人類にとってある意味では必然的な運命でした。そしてじっさいそれにより人類は社会・文化環境という人類のみが作りえた人為的な第二の自然を極度に高度化することが出来たのでした。たとえば近代的な都市環境を基盤としながら形成された工業文明のあり方はその帰結でした。

だがこのことは同時に人類の反自然性を極端に強める結果をもたらしました。本来ならば第一次的自然との直接的なかかわりの中で生命体としての人類が引き受けなければならなかった様々な課題が、人為的な社会・文化環境の中で作り出された技術的手段によって引き受けられ代替されることにより、人類は第一次的自然とのかかわりを通じて自らの生命体としてのあり方を自覚する機会を大幅に減少させていったのでした。つまり人類は産業文明化された社会・文化環境の中で自らの内なる自然への覚醒の機会をしだいに忘却していったのです。

この自らの内なる自然の忘却は端的に生命の持つ根本機能の衰退を意味しています。もう少し具体的にいえば、身体と精神、外部の自然と内部の自然の有機的な一体性のなかで形づくられる awareness の劣弱化をもたらすということです。人類の中で、五感を通して外なる自然の様々な動きを内なる自然において受けとめる力、手触りや皮膚感覚によって自らの生命環境の変化の微細な兆候を感受する能力、とりわけバランスの変化によって生じる生命への脅威や危険をすばやく察知する能力などが極端に衰えていったのでした。

日本の代表的なアニメ作家の一人である押井守が製作した「攻殻機動隊」シリーズという極めて衝撃的な SF アニメドラマには、身体をアンドロイド化され、脳の働き、とくに情報としての知識や記憶に関してもコンピュータ端末を通して自由に交替しうるような未来の人類のイメージが登場します。それは、人類の自然性が完全に人為の側へと吸収され尽した結果、脳の働きのうちの知性領野だけを残して後は全部人

為的な技術に代替されてしまった人類のあり方を暗示しています。押井の描く世界はたしかに空想物語にすぎませんが、しかしそこで寓意的に表現されている事態は今の私たちにとって決しておとぎ話として笑ってすませることは出来ないはずです。

今私たちの周りを見ると、ごくふつうの日常的な行動や判断が出来ない人間が若年層を中心に爆発的に増大しています。他人との自然なコミュニケーション、思いやりや配慮、気遣い、察知、物事を処理するための手捌きや手際、段取りなどはもとより、悲しいときには涙を流し嬉しいときには歓声を上げるという自然な感情の発露、共感や連帯の意識を他人に対して持つことなどのごく基本的な身体やこころの作法さえも身につけていない人間が私たちの周りに多数存在します。

こうしたことは、そのような作法を必要とすることへの気づき、つまり awarenes を忘却してしまった結果生じているのです。そしてそれは、そのような気づきの条件である私たちの内なる自然が人為的な手段によってどんどん代替されていくことによってもたらされたのでした。まるで繭のなかに包み込まれたさなぎのように、一切の直接的自然への接触を断たれ人為性のうちで微睡んでいる状態、といったらよいのでしょうか。これこそ人類の反自然性の行き着いた姿といえるでしょう。押井が描いた「攻殻機動隊」の世界はそうした事態をまさに寓意しているといえます。

たしかにこれは進化と呼べる側面を持っています。なぜなら、こうした事態は、人間の様々な労苦を軽減する技術的手段の発達の結果であり、利便性や効率性の追求の果てに現れたものだからです。だが一方でこうした反自然性、自らの内なる自然の生命の忘却が戦慄すべき結果を生み出していることも見落とすわけにはゆきません。今産業文明の発達した先進社会において宿痾というべきものとなっているのは、若年層を中心とする薬物やネットへの過度な依存現象です。それは、人為的な技術手段によって内なる自然や生命の働きまでもが代替されてしまうことによって自分が生きているという感覚、その確証を自分自身の内なる自然の中に求めることが出来なくなってしまった結果の現われといえるでしょう。その基底にあるのが気づき、awareness,の忘却であることはいうまでもありません。そしてこうした事態がより深刻になると、内なる自然や生命そのものを不要なもの、おぞましい余計なものとみなして攻撃するような傾向へとつながっていきます。

今これも若年層を中心に爆発的に拡大している引きこもり、「リセット」願望、過度なダイエットによる拒食症や過食症、注意・パニック障害、抑鬱、リストカット、OD（鎮痛剤や精神安定剤をいっぺんに大量摂取すること）、自殺衝動などの諸現象（自傷行為）はすべてその具体的な現れです。そこでは死という決定的な事態に至ることさえいとわない形での自らの内なる自然、生命への攻撃が行われているのです。それは、若者の間でよく使われている言葉で表せば、生命体としての人間が「壊れてゆく」という事態に他なりません。裏返して言えばそれは、内なる自然、生命が発している警告ともいえるかもしれません。

ちょうど１９世紀の先進社会であるイギリスで多発した女性のヒステリーが、フロイトによって明らかにされたように、産業文明が強いる人為的な規範による過度な身体への抑圧に内なる自然が爆発的なかたちで反抗した結果であったのと同様に、上記のような諸症候は心身の総体にまでも及んだ産業文明の人為的環境による内なる自然の抑圧への反逆なのかもしれないのです。

このような内なる自然の抑圧とその結果生じた awareness の衰退・劣弱化、そしてその裏返しとしての自己攻撃衝動は、私たち人類の生存環境を根底的に脅かしつつあります。というのも自己の内なる自然への攻撃衝動は単に自分自身への攻撃だけでなく、容易に他人への攻撃に変わりうるからです。

実際今世界には様々な暴力衝動や殺戮衝動があふれています。マスメディアはほとんど毎日のように無差別・無動機としか形容のしようのない不可解な殺人事件が起きていることを報じています。それ自体はいまだ社会のごく一部の現象にとどまっていたとしても、その根底には深刻な病巣が隠されています。しかもその病巣は広がりと深さを帯びつつあります。今一番恐れなければならないのは、こうした事態の先に人類の生存環境の根底からの破壊が予感されるということです。ニートと呼ばれる職に就かない若者の増大は、単に経済的理由だけに起因するわけではありません。むしろ重要なのは、まるで砂の城のように私たちの生存環境が崩壊しつつあることなのです。難破しようとする船からねずみたちはいち早く逃げ出そうとします。それが迫りつつある危険への警告を意味しているのと同様に、社会からドロップアウトしようとするニートたちの存在もまた、危機的ともいえる私たちの社会の状況に対していまだ充分に自覚的でない私たち大人への警告だと考えることが出来ます。

７．マニュアル・サービス社会からの脱却

こうした事態は、産業文明の過度な進化の結果社会全体がマニュアル化されつつあること、言い換えれば「マニュアル・サービス社会」化しつつあることと深く関連しています。マニュアルにもとづくサービスの提供は、内なる自然を人為的・反自然的な技術手段によって代替することにより利便性・効率性を極限まで高めることを目指しています。一切の自然性の抑圧と忘却こそマニュアル・サービス社会の目標なのです。自然性は利便性や効率性にとって阻害要因でしかないからです。

こうしたマニュアル・サービスのあり方が、大量画一生産にもとづく簡便さをセールスポイントとするハンバーガーチェーンから広まっていったのはまことに象徴的です。なぜならそれは、食という人間の生存の根幹に関わる領域、つまり人間の内なる自然の土台というべき領域がマニュアル・サービス化されるを意味するからです。あるいは２４時間営業という生命体の自然な時間のリズムとかけ離れた営業形態を持つコンビニエンスストアにしても同様です。今世界全体がハンバーガーチェーン化・コンビニ化しているというべきです。awareness を抑圧し忘却へと追いやるマニュアル・サービス提供のスタイルが世界を席巻しているのです。そして深刻なのは、そのことによって何がもたらされるかに無自覚なまま社会全体がマニュアル・サービス化を推し進めている結果として、すでに言及したような内なる自然、生命の反乱が始まっていることなのです。それは社会・文化環境の全面的な破壊に、そしてついには自然、生命そのもの破壊にさえつながってゆきます。

とくにこのことは１９４５年の敗戦以後、高度経済成長にもとづく産業文明の高度化によって豊かさの実現を目指してきた日本社会にあてはまります。たしかにマニュアル・サービス社会の実現に向けた利便性や効率性の追求は社会全体を豊かにしたことは否定出来ません。しかしフリーター・ニートが数百万のレヴェルに達し、自殺者が毎年３万人を超え、壊れてゆく人間たちの様々な悲鳴が聞こえてくるこの日本社会の現状は、利便性や効率性だけをひたすら追求するマニュアル・サービス化の極度な進行と無関係ではありません。私たちの社会は今、目先の経済利害や得失を超えてマニュアル・サービス社会のあり方そのものを根本的に見直すという課題に真剣に取り組まなければならないところまできているのではないでしょうか。

私たちがホスピタリティ問題に取り組もうとした最大のポイントはここにあります。ホスピタリティは

何よりも今破壊されつつある人類の内なる自然、生命の回復への呼びかけであり気づき・覚醒への促しだからです。

そのためには産業文明の構造を根本的に転換することが、とりわけマニュアル・サービス社会の活動様式や価値観を根底から変えてゆく必要があります。ホスピタリティはこの、ある意味でいえば「革命」ともいうべき転換を通して、人類およびその社会・文化環境の持続可能性（サステナビリティ）を生命という次元に根ざした形で実現するための原理に他なりません。

問題のポイントは、まずホスピタリティの目指す「快さ」の意味を産業文明的構造の中で抑圧され毀損されてきた人類の内なる自然、生命の解放として捉え返すことであり、ついでどのようにその「快さ」を核とするかたちで社会・文化環境設計の原理を立てるかを解明することです。そのとき重要な転轍点となるのがマニュアル・サービス社会からの脱却であることは今述べた通りです。もちろんたんにマニュアルが悪いとか、サービスではだめだと言っているわけではありません。マニュアル・サービスに凝集している利便性や効率性の発想、あるいはその根底にある反自然性が問題なのです。その際に、ある意味では極めて単純なことですが、マニュアル・サービス化された環境がじつは「決して心地よくない」ということに気づくのが大切なポイントになります。この心地よくないという感覚は、自分自身の内部にある自然や生命への気づきの媒介となります。言い換えれば、ここを手がかりに真に気持ちいいもの・快いもの（その根源としての生命的なもの）への気づき・覚醒を促してゆくことが重要なのです。それを可能にするのがホスピタリティです。

あなたはほんとうにおいしいと思ってハンバーガーを食べていますか？あなたはほんとうに携帯がなかったら「生きられ」ませんか？あなたは足の裏で土の感触を確かめたことがありますか？あなたは自分のからだが内部から発している鼓動やリズムに耳を傾けたことがありますか？あなたは・・・・。

８．ホスピタリティの根本的課題

ホスピタリティは、こうした快さへの気づき・覚醒を、私たちの生活環境全体の設計原理、具体的な作法、構成、パフォーマンスのあり方を変えることによって可能にするための条件であり方法です。つまり衣食住・職業・対人関係などの諸要素をこの快さを軸に全面的に再編成する原理こそホスピタリティだということです。それは同時に私たちの内なる自然、生命の中に隠されている未知の領域や力、エネルギーを解き放ち可視化するということでもあります。自然と人為の対立を超える生命環境の有機的かつ自律的な一体性・全体性を真に発現させ、さらにそれを人類の新しい文明形成に生かすことが出来る方途を明らかにすることがホスピタリティの根本課題なのです。こうしたホスピタリティ問題の意味をまずは確認するところから私たちのホスピタリティ研究は始まります。

そしてこうしたホスピタリティの根本課題への気づき・覚醒は今日本社会の中でもいろいろな形で始まりつつあります。とくに「農」の意味を、たんに農作物の生産というだけでなく、自然環境と人間の生存環境の関わり（たとえば「里山」の見直しや循環型生廃棄物処理法の促進など）、食を軸とした生活スタイルのあり方（たとえば「地産地消」や「産直」の提唱）、その土台となる生活価値や目標の立て方（いわゆる「スローライフ」や「エコライフ」）などの課題とも結びつけながら、生命＝生態型の有機的環境づくりに向けた要として捉え返そうとする試みが全国に広がりつつあります。

そうした試みは、産業文明によって覆い隠されてしまった持続可能性志向的な生活文化のスタイルを再生させるという意味を持つとともに、新しい技術や産業をやみくもに排除するのではなく、そうした持続可能性の実現に向けて有効に活用してゆこうとする志向も含んでいます。山形県が発行している月間情報誌『いま、山形から…』は、毎号興味深い特集が組まれていてなかなか内容が濃いものですが、２００６年１０月の特集では、山形県内の「グリーンツーリズム」のいくつかの拠点が取り上げられています。たとえば、秋田との県境に近い金山町杉沢地区では、栗山和則氏が、早くから「農」を通じた自然との共生の問題を考察し、自ら全国の山村歩きを実践してきたユニークな哲学者内山節氏（立教大学教授）と協力して「暮らし考房」を設立し、山村の暮らしが持つ豊かさを都会の人たちが体験できる長期滞在型のグリーンツーリズムの拠点としています。

また縄文期からの長い生活文化の歴史を持つ高畠町のある村山地方では、山川喜市氏が「蔵王マウンテンファーム」を作り、２０年以上にわたって「いのちの教育」や「食育」などの教育活動を含むグリーンツーリズムを実践しています。

こうした実践は今文字通り全国津々浦々に広がっています。こうしたことを、今流行りの「癒し」というような安直で退嬰的な言葉に解消してしまってはなりません。もっと積極的なかたちでホスピタリティを通した社会・文化環境そのものの、あるいはさらにそれを含む地球生態環境全体の根本的な編成替えにつなげていかねばならないと考えます。

本論において事例研究の対象となっている琵琶湖畔の新旭町針江地区の「水に根ざした暮らし」や奥丹後地方の伊根町の「舟屋の暮らし」にしても、沖縄、とくに先島諸島における「命（ぬち）どぅ宝」（命こそが宝である）という言葉に象徴されるような、生命の根源的なリズムに寄り添おうとする暮らしにしても、そうした課題の重要性を私たちに教えてくれるものです。

９．おわりに ― 生命・脳科学の分野への着目

その一方私たちがこの課題へと迫るためにもう一つの方法として注目しつつあるのが脳科学や生命科学、免疫論などの分野の新しい成果です。そこには今までの私たちの常識を覆すような人間の脳の働き、あるいはそれを含む生命環境としての人間の身体や意識・精神の働きに関する知見が生み出されています。そこでは従来のシステム／要素やプログラム／データというような二元論（この二元論の根底には、デカルト以来の意識／身体の分離、さらに言えば物理現象化された生命と人間の固有性の証としての意識・精神の峻別があります）では語りえないような生命や脳のダイナミックな全体性や運動性が明らかにされつつあります。そしてこうした新しい理論は、生命や脳の活動が遺伝子や細胞のレヴェルから生体としての全体性にまでおよぶ不断の運動の過程であり、さらにはその運動の過程の中から生みだされる変化の連続性そのものであること、そしてこの生命や脳の活動の不断の運動および変化の過程のうちにおいてあらゆる要素が互いに作用しあいながら結びつきあっていることを、言い換えれば、生命や脳の活動において個々の要素がばらばらに個別的な形で存在するのではなく、むしろ要素どうしの相互相関関係が運動や変化の過程として現出するダイナミックな全体性の方が先にあり、個々の要素はそこから後になってはじめて分離された形で取り出されることを、私たちに教えてくれています。たとえばこころが「快さ」を感じつつ

あるとき免疫力が飛躍的に増大するという事実が確認されていますが、それはまさしくし私たち人間におけるこころと身体の相互相関的な全体性の所在を証明するものだといえましょう。そして重要なことは、こうした全体性に生命や脳の活動の根源を求めること、さらにはそうした全体性をこれからの科学技術や社会設計の原理へと反映させてゆくことが、近代産業社会の土台となってきた伝統的な世界観の枠組み（パラダイム）としての原子論的・要素主義的モデル――それは同時に物理＝機械論的世界観の土台でもあります――が根底から覆されることへとつながってゆくかもしれないということなのです。今もっとも先端的な科学分野で起こっているこの一種の「理論革命」は、今までの AI（人工知能）をめぐる議論などとは比べものにならないくらい大きなインパクトを含んでいます。それが、生命の運動的なダイナミズムを原理的に反映しうるような、極めて動態的かつ相互共生的な社会・文化（技術も含め）環境のあり方を実現するための理論的媒介となりうるからです。こうしたことも私たちのホスピタリティに対する考察の重要なポイントの一つになります。